

朝鮮

北鮮から姉と弟の引揚げ体験記

茨城県 中本信子

戦前の生活状況

私は明治四十二年、本籍地徳島県名西郡浦庄村字下浦において、歯科医である父河崎正信、母サイの長女として生まれた。父は徳島市船場町で開業していたが、父のところへ第一次世界大戦のドイツ人捕虜が齒の治療によく来ていた。「私のドイツに残した子供もこの子くらい」と言つて幼稚園児の私を抱き上げたり、頭をなでてくれたが、私は怖くて大声で泣き出してしまった。また、「日本のドイツ人収容所は親切だ」と喜

んで父の分厚い本に美しいドイツの花文字で記念のサインをしてくれた話など、徳島で暮らした思い出になつている。

大正五年に弟智俊がこの船場町で生まれた。

大正六年に父が朝鮮総督府管轄の平安南道平壤道立病院歯科医長を命じられ、家族を連れて赴任し、平壤府南町に居住した。

大正八年に朝鮮に暴動が起こり、父も診療外は官服にサーベル姿で各科の医官と一緒に警備に狩り出されたが、日本官憲により間もなく暴動は治まり、平壤は元の平和を取り戻した。父は昭和三年に官職を辞任し、口腔外科、歯科一般を標示して開業した。平壤で生まれた弟妹三人を加え家族七人が平壤府寿町に住み、私たちは両親の元で小学校、中学校、女学校を皆同じ平

壤で学び育った。

「女の子でも何か生涯役に立つような資格を身につけさせてやりたい」という父の考えにより、私は昭和七年に平壤から近い京城齒科医学専門学校を卒業（第三回生）し、結婚までの四年間父の元で齒科医療に専念した。

私が主人（十人きょうだいの長男（内二人夭折）と結婚したときは、すでに三人の義姉妹が結婚していたが、翌十二年に私たちに長女が生まれた。家庭は還暦を迎えた義母と、私たち夫婦と子供及び義弟二人、義妹二人の八人家族だった。

主人の両親はすでに明治四十三年の日韓統合以前に故郷山口県より志を立てて、渡鮮し、北鮮平壤府水玉町に居住。全鮮にわたって、朝鮮人向け陶器金物卸商（主に食器）を経営していた。他にも西鮮清涼飲料会社（主にサイダー、ラムネ）を持ち大きな店舗を構えていた。

現地の朝鮮の人たちとも仲良く融け合って、家族のような親密な交流が続いていた。特に主人の母は朝鮮

人の使用人を大事にして世話をし、朝鮮語も堪能であった。皆が平壤を愛しこゝを永住の地、第二の故郷としてお互いに朝鮮人と学び合った。日本人家屋にも暖かで子育てに適した温突おんじょくが設置され、酷暑の平壤の冬も幸せに過ごせた。

昭和十九年七月に長男が生まれた。

ところが、北鮮で終戦を迎えるという悲運がこゝとは、当時はだれも知るよしもなかった。

博川はくせんに疎開して

平壤にもB29襲来の警報サイレンが鳴り響くようになり、庭に造った防空壕に私は家族と一緒に、生まれて間もない長男を抱いてかけ込む日が続いた。幸いにも米機は爆弾を投下しないで西へ消えホツとした。第二次世界大戦で欧州では独ソ戦争、アジアでは日本が米英連合軍により致命的打撃を受けているとき、家族が相談してまだ安全と思われる博川郡の叔父宅へ、私は子供二人を連れて、昭和十九年十月疎開した。叔父は主人の母の実弟で長年平安北海博川に住み、葡萄酒製造工場を経営していた。工場には現地の朝鮮人が大

勢働いていて、叔父夫婦も彼らのために親身になってよく面倒をみていたので、朝鮮の人たちも叔父を親のように慕っており、何の問題もなく平和な生活が続いていた。

叔父夫婦には子供がなかったので、私の子供を大変かわいがってくれて長女はすぐに、平壤の山手小学校（一年生在学中）から博川小学校へ途中編入させてくれた。静かで平和な村だった博川も日本の敗色が濃くなるにつれ、物資は不自由になり、昭和十九年の暮れから二十年の五月ごろになると叔父の工場も葡萄酒の原料が入らなくなり製造停止となった。機械は軍に徴用され砲弾に変わった。次第に朝鮮人が集会を開いては不穏な行動を取るようになり博川小学校も閉鎖、いつの間にか朝鮮人の間に赤衛隊が組織され、腕に赤い腕章を巻いた朝鮮人グループが、日本人家屋に押し入ってはお金や食糧の略奪が繰り返されるようになった。日本人は外出できず、終日窓を閉めカーテンを引き、赤衛隊が門扉を破る音がすると、私たち親子とチエネ（朝鮮人のお手伝いの娘、叔父が世話している孤児）

を叔父は押し入れに隠した。

彼らは銃剣を持って侵入して来るので、毎日毎日が恐怖の連続で子供は怯えて私から離れなかった。主人が迎えに来てくれることもできず、平壤も大変なのか音沙汰なく毎日が気が気でなかった。そんなある夜更け、叔父夫婦を親のように慕っているオモニ（朝鮮人のお手伝いさん、朝鮮語でお母さんの愛称）が私の部屋に来て「奥さん平壤帰りたいか」と言った。私はびっくり仰天し、飛び上がって喜んだ。「私、平壤帰りたい、私、平壤帰りたい」子供を引き寄せ、オモニにすがって泣いた。「お父ちゃんとこへ行こうね」二人の小さい子を抱きしめた。すでに叔父さんたちにも話があると言おう。ご恩返しをしたいと言ったそうである。「あした朝五時、主人トラック平壤行く、三人乗るいいよ」オモニが変装用の白いチヨゴリ（私と子供用上衣）、チマ（長いスカート）、おんぶ用布、既婚の女が前髪を包む白い布、朝鮮靴まで揃えて持って来てくれている。もう三時間しかない。とにかく少しでも子供を眠らせなくてはと寝床に入れて、哺乳用具、

おむつ、身の回りの物を大急ぎで手提げへ押し込み、変装の支度に取り掛かった。白い上衣とスカートをつけ、髪を朝鮮風に結び角隠しのような白い布をかぶり後で結んだ。赤ちゃんだった長男を腰にのせ、おんぶするため布で背中とおしりを包み、前へ回してしっかりと結んだ。ところが歩こうとしたらよろけて歩けない。オモニが笑うけれど、私には生まれて初めての経験でこんなふうには子供をおぶつことがなかった。何だか情けなくなってきた。ポロポロ涙が落ちる。「よく似合うわ」と叔母さんが励ましてくださる。ようやく腰で調子をとって歩くことを覚えた。グルツと横に回せばすぐ赤ちゃんは母乳が飲める仕組み。朝鮮の人の知恵に驚いた。

門にトラックの音がしオモニの主人が来てくれて叔母さんと話をした。「私たちはほかの皆さんと一緒に汽車で平壤に出るから、心配しないで先に帰りなさい」と言われた。「どうぞ御無事で」とお世話になつたお礼を述べ、オモニの主人の運転するトラックに乗せてもらった。

彼は人気のない山道ばかり全速力で平壤へ走った。こんなことであるだろうか。オモニ夫婦の善意がなかったら、と思うと感謝で胸がいっぱいになる。私はこの人たちに何もしてあげていないのに……。突然トラックの前方に赤い腕章をつけた怖い男が三人現われ手を上げて「のせろ」とどなった。オモニの主人が私たちに、「日本語ダメ、殺される」と小さい声で強く注意してくれた。何だか恐ろしくなつて、子供を抱え込み「だまつてるのよ」とささやいた。頭から血がスーと引いていくようだった。ドタドタと男たちが乗り込んできた。娘の顔が真っ青だ。かわいそうに……。親の心が感応するのか二人の子供は泣かなかつた。オモニの主人はさぞハラハラ心配だったことだろう。

赤衛隊の朝鮮人たちは私たちをこの運転手の家族と思ったのか無関心だった。トラックが夕暮れ近く我が家の裏通りで止まった。三人の男たちは飛び下りてどこかへ行ってしまった。オモニの主人が連絡に走り私の主人が飛んできて、「よう戻つたな」と小さい娘を抱き上げて泣いた。七月に平壤に帰って来て、八月

に入った途端、平壤と博川間の交通が遮断された。

叔父夫婦も何とか無事に平壤へ帰られたようだ。もう少し私たちが平壤へ帰るのが遅かったら、オモニ夫婦の善意がなかったら、私たちは家族と生き別れになつたかもしれない。

日本の終戦直前にソ連が日ソ不可侵条約を破棄して参戦し、北朝へ侵攻するとは、当時の私たちには思ひもよらないことだった。

博川から帰壤後、私たちは家族と一緒に水玉町の家で終戦の詔勅を拝した。

北鮮に居住していた日本人は終戦の年も帰国できず、ソ連占領下で苦難の抑留生活を強いられた。その後の引揚げについては、より多くの体験と苦勞をそのまま書き残してあつた亡き弟の手記を次章に引用することにした。

戦争集結より平壤脱出引揚げまで

(弟) 河崎智後の遺稿より

私(智俊)は昭和十四年父の母校東京歯科医学専門学校を卒業後、満州国新京病院歯科医長として派遣さ

れ、昭和十五年関東州大連聖愛病院に転任中に結婚。

昭和十七年父病気のため急遽同病院を辞任し平壤へ帰り、父を助けて歯科医療に専念。その間平壤府歯科医師会理事を兼任中、戦局は次第に緊迫し昭和十九年七月、私は平壤府警防団第二分団救護班団長を命じられ、危急の場合地区住民の避難訓練に従事していた。

私たち日本人は報道機関の統制によって終戦の日まで敗戦を知り得なかつたが、彼らは短波放送で世界の情勢を完全に把握し、終戦の前に既に日本の敗戦を予知していたらしく、終戦の日が近づくとつれて日本人に対する朝鮮側の圧迫も、加速度的に加わつた。

昭和二十年八月十五日の終戦詔勅を聞いてからの私たちの生活は大逆転をし、敗戦国民というレッテルをはられてしまった。それ以来、我々は目、耳、口をふさがれて全く人間としての自由を奪われてしまった。来る日も来る日も不安と焦燥でおかしくなりそうだった。

終戦の日を期して彼らは過去三十六年の日本統治の悪政を批判し、朝鮮独立万歳を叫んで街頭を謳歌し始

めた。終戦の二日前に関東軍の将来を心配したその家族（大方婦女子）三千余人が、奉天、新京地区より避難して来た。その人たちはいったん日本人遊廓に収容された。次の移動が一日の差で蹉跌を来し、その人たちの予想もしなかつた苦難が始まつた。

そのころから日本語の使用が禁じられた。また、すべての行政機関が占拠され、道庁、府庁、警察、学校、そして銀行、郵便局が全くその機能を停止してしまつた。そのころ、日本の無力を見てとつたソ連軍は、かつての不可侵条約を無視して、昭和二十年八月九日朝鮮国境を突破して南下し、一方、天山、羅津、清津に艦砲射撃を加え破竹の勢いをもって進攻してきた。

平壤には二十師団。航空隊も、高射砲隊もあり、私たちも大きな期待を寄せていたが、師団長は内地へ遁走し、軍は全く無抵抗でソ連軍に占拠された。残留日本人にそのしわ寄せがきて、日本人居留民団が作られたが全く無力で彼らの言いなりになつた。また、日本人会を通して武器の接収、家屋の搜索が始まつた。

ソ連軍の平壤占拠は昭和二十年九月二十四日午前六

時であつた。我々もソ連軍入壤を祝つて赤旗を立てさせられた。

ソ連軍による男狩り（十八歳〜四十五歳）そのうち、在郷軍人はもちろん、役立ちそうな日本人男性は抑留されソ連へ送られた。日本人会会長は次々と警察へ連行された。彼らがかつての行政機関の代表者（知事、府事、警察署長）その他の幹部職員を満州国の延吉へ送つた。

ソ連軍（下士官一人、兵三人、通訳一人）による家屋接収はいとも簡単に実施された。住居を奪われた日本人は、未接収に実施された。住居を奪われた日本人は、未接収の日本人家屋に集結させられ雑居生活を強いられた。また、どこの軍隊にもあるように、長い間の戦いに飢え切つたソ連軍は、略奪、暴行を欲しいままにして、夜昼なく犠牲に供せられる女たちは数知れず。日本人会も日本共産党が幅をきかせて暴力をふるい、我々に強制労働を命じた。

一方ソ連軍は道庁を接収して「北朝鮮ソ連軍司令部」を設置し、いよいよ占領行政が始まつた。平壤神

社も破壊されソ連兵戦没将兵の慰霊場となった。かつての日本人が設置した警察に愛国班長以上の日本人が次々と召喚され尋問責めが行われ、そのため哀れ故国日本を夢見ながら刑場の露と消えた人も数知れず。

街頭には日本軍人が、また、日赤看護婦が次々と満州へ連れて行かれた。北鮮の共産化は着々と実施され、いつの間にかソ連へ亡命していた金日成が多数の部下将兵を連れて意気揚々と帰ってきた。彼は直ちに保守系朝鮮人、親日系朝鮮人を圧迫して人民政府をつくり、かつての日本人の行政機関を一手に収めて彼らの運営するところとなった。

我々に対する圧迫はますます強くなり、勤労奉仕、堤防工事将校官舎の雑役などが日本人会を通して狩り出された。この勤労奉仕に出たまま帰らない婦女子は哀れにも数知れなかった。

金日成の人氣は圧倒的で、彼の率いる二万の軍隊がその後ろ盾である。スターリンの肖像画と彼のを並べて、あらゆる集会場に掲げられ、すべての行政機関がソ連式になった。

私の関係していた医療面でも、完全に国営となり開業は統轄され、七つの人民病院が設置された。(第七人民病院)

日本人の開業医の器械、薬品は文句なしに接收されて、満州その他の引揚げ朝鮮人医師、歯科医師に家ごとに配布された。薬局もまた同様であった。そしてこれらはすべて「北朝鮮人民政治委員会保健部」によって統轄された。

私たちの家屋は朝鮮人(刑事・洗濯屋)によって接收され、私はソ連軍直轄の第七人民病院へ勤務を命じられた。この病院は日本人のために設けられ、在留日本人及び日本人避難民がその対象であった。また、この第七人民病院には七つの診療所が分院として持たれ、その内の一つ「解放軍診療所」が私の受持ちで、「市辺里」にあった。そこには終戦前に避難してまた関東軍将校の家族たちがいて、大部分が婦女子であった。その人たちは打ち続く苦難の中で病にかかるものが多く、集団生活特有の皮膚病や発疹チフスが猛威をふるった。特に昭和二十年十二月には本疾患に罹患するも

のが、收容人員の八割、死亡者も千二百余人となった。これら死者の取扱いは困難を極め、棺桶もなく毎日四人、五人と大八車にごぎを敷いてその上に直接ころがし、その上にむしろをかけて約四キロメートル離れた山に埋めるといふより捨ててくる。次の死者を運んで行ったときは、山犬が食い荒らしているという状態で、各診療所關係を総合すると約二万人を下るまいと思われる。

当時私たちの生活も底をつき、時の日本人会は、北朝鮮人民委員会を通して内地引揚げを何回となく懇願してきたが、その見通しは全く困難を極め、昭和二十年も十二月を過ぎ二十一年になってしまった。

ソ連軍は一挙に南下して開城まで進出したが、また、米軍によって追いつ返されたので三十八度線をますます強化する一方、朝鮮人青年の軍隊教育を始めた。日本人は食うに食なく、住む家もなく街頭に日本人の乞食が始めた。

切羽詰まった日本人はソ連軍の引揚げ許可を待たずして、三十八度線越えを企画するものがあっても、大

部分はソ連軍や朝鮮軍に捕らえられ、海州のそばの孤島へ強制收容されるか銃殺された。しかし、そのようなときにも、日本人と個人的に親交のあつた朝鮮の人は、ソ連軍や朝鮮軍にかくれて我々を慰めてくれたり、物心両面からの援助を惜しまず、内地引揚げの一日も早らんことを祈ってくれた。しかしこれら愛深い親日家も、時代の流れには勝てず、政府の圧迫によつて次第にその影をひそめ、民族独立という主流の中に包含されてしまった。日本人の脱出者がますます増え、また落ご者も多くなり、ついに終戦の翌年六月ころからソ連当局が一日五十人ずつ、三十八度線越境を黙認したけれど、それはもちろん生命の保障のない脱出である。北朝鮮人民政府は、この黙許と同時に脱出ルートの警戒を厳重にした。また落ご者のために、所々に露天の收容所を設け、医療保護を行うことになり、日本人医師の選抜派遣を命令してきた。私は進んでこの命令に応じた。行き先は黄海道、市辺里である。

「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」と諺にあるように、私は決意し家族も我が身も捨てて虎穴に飛び込む

ことにした。このころソ連将校や朝鮮人は小遣い稼ぎのために貨物自動車や汽車で日本人を開城まで輸送するからと、法外な大金を要求した。日本人の中には金を工面して自動車や汽車に乗ったものの事実は全くこれに反して幾多の婦女子の暴行事件、機関車の行方不明などの計画的暴行を受ける結果になった。

一日五十人の越境黙認がますますその数を増し、一日四百人、五百人となり、また脱出途中の落こ者も次第に多くなった。市辺里經由の脱出ルート三つの中で一番危険も少なく、また利用者も多い左記の経路を選ぶことにした。

市辺里―大南―小南―三十八度線―開城

私はこの市辺里にある診療所の医務室勤務を命じられた。私はソ連軍司令部発行の自分の写真入りの証書を持って家族（父、母、妻、子供二人、弟妹の七人）を平壤に残し、後ろ髪を引かれながら身を捨てて虎穴に飛び込んだ。

私の班は医師一人、看護婦四人、助手三人の第一班で目的地市辺里へ車で向かった。市辺里は平壤から三

十里の所にあつて、途中には脱出日本人が続々と列をなし、親が子の手を引き、老人を背負い、互いに励まし合い我々の自動車の方に手を振っている。乗せてあげたくても乗せられない。この気持ちの切なさ、ただ大声で励ますだけだった。だれもが開城へ、開城へと向かっている。我々の方も部落を通過することに嚴重な荷物検査と人員検査があつた。

目的地市辺里に到着したのは夜中の一時であつた。当時市辺里にはまだソ連軍の進駐もなく部落には旧日本の警察所がその医務室に当てられ、朝鮮人警察署長が行政警備に当たっていた。すでに市辺里には脱走日本人が充満していて河原で野宿していた。署長が我々医療班の到着を心から喜んでくれて土地の人たちも非常に温順で、署長の命で我々にはこの地一流の料理店がその宿舎に当てられた。私は主任医師として医務室を開設、部落民の要望も入れ部落の人たちの医療にも当たった。私は署長から日本人所有の医薬品検査係も命じられた。一時間三十分おきに続々と押し寄せる日本人満載のトラック、どの顔にも三十八度線突破の決

意が見え、青天井を仰いで野宿するのである。仮医務室はたちまち満員となり河原に急造の藁ぶき病室が作られた。そこで病氣や、けがの手当てを受けて三十八度線に向かうのだが、経済的にゆとりのない人は全コースのほとんどを歩いて突破せねばならなかった。

親に捨てられた子、迷い子、子に捨てられた親、ソ連軍の犠牲となった娘たち。行方不明の子、あらゆる悲劇が敗戦という現実の中でつくり出された。目的を達し得ず病に倒れ、無念の涙にくれながら、犬猫のように野たれ死する人々の慟哭、所々に白骨が見られ異郷の土になり果てる姿は、とても涙なしには見られなかった。

落ご者の多くは強行軍による外傷、栄養失調、母乳不足により餓死する乳児、重症結核による大咯血、子供を残して病没する母親、毎日が悲惨の連続だった。

昼夜の別なく医療に努力しているうちに二週間は夢の間に過ぎ、三週目になった。

夜中突然ソ連軍の襲撃に遭い、「娘ダバイ（早く）」に押し問答、やっと撃退したものの、我々はソ連軍に

よって留置場へ連れて行かれ、医療の中止を余儀なくさせられた。その将校は私の胸に銃を突きつけ「娘二十人を出すか、否か」と迫ったが、私の説得で何とかその場は治まりやっと釈放された。しかし、この後も、娘二十人の代価として危険にさらされることを直感した私は、日本人会連絡員に託して身の危険を家族に告げた。家族も引揚団体の方も驚き、平壤脱出を準備し、一週間目に幸運にも家族と市辺里で再会することができた。市辺里を脱出のルートにと決意したことが実現するよう、切に祈った。家族八人（両親、私たち夫婦と子供二人、弟妹）を含め平壤脱出団体三百八十人がそろったのでソ連軍、朝鮮軍及び日本人会に連絡して、私の任務を解消してくれるよう手続をしたところ、後任派遣が決定したので、その到着を待ち三十八度線を突破することになった。

このときの当局の許可条件は、できるだけ多くの病人や婦女子を連れて突破せよとのことであった。私の市辺里での昼夜兼行の勤務は署長の認めるところとなり、私たちのために一夜送別の宴を設け私の努力を賞

賛激励してくれた。国境を越えた著長の温かい心尽くしに一人泣かされた。敗戦後こんなことは想像だにしなかったし前代未聞のことである。「誠心」こそあらゆる民族を通して永久に変わらぬ真理である。

このときほど自分を幸福なものに感じたことも、更に医師としての責任を痛切に感じたこともなかった。明日の三十八度線突破コースの構想にいつか明け始めた東の空に、真紅の太陽が我々の前途に輝いていた。

私はここで平壤からの引揚団体と市辺里の三百二十人を含め、老人、婦女子を中心に約七百人を七班に編制した。お世話になった市辺里警察署長と五人の刑事諸氏に別れを告げる時がきた。お互いの手を堅く握り明日への前途を祝し合った。種々の情報の総合判断をすると、目的地開城までは、約六十キロ、途中の乗り物として牛車、これは全コースの三分の一、二十キロで大南まで、それから先は危険が伴うので牛車は行かぬ由、それより四十キロはどんな病人、老人、婦女子でも徒歩で突破ということであった。三十八度線国境にはソ連軍の前哨がおり警戒嚴重、三十八度線上の

山々は標高四百メートルの峻険な山とのことで、我々の団体としては少し荷が重すぎるように感じた。

午前六時諸般の準備が完了し、我々脱出団体は市辺里を出発し、いよいよ三十八度線に向かうことになった。第一班・第二班を先頭にそれより百メートルおいて本隊（第三、第四、第五、第六）これより十メートルおいて第七班、進行体系として第一、第二、第七班には比較的元気な男性を主として、本隊には病人、老人、若い娘たちを伴って編制、お互いに連絡を緊密にし、先頭は中村氏、最後は団長の私がつとめた。

私は連絡員数人を連れて一人の犠牲者も出さないよう気を配りながら前進した。私は多少朝鮮語が話せたので途中全部朝鮮語を使った。

各部落を通過することに、検疫料十円、荷物検査料十円、部落の通過料十円、計三十円を徴収された。その夜は大南で一泊、ここは朝鮮側の検査だけですみ、翌朝五時太陽が昇るのを待ってただひたすらに、小南に向かった。小南は北朝鮮の国境第一線で警戒も特に嚴重で、朝鮮軍人の往来も激しくいよいよ国境近くを

思わせるに十分であった。ここには日本人会から派遣された日本人駐在員がいて、あらゆる困難を克服して駐在しておられ何かと世話をしてくださった。これは私たちにとつて暗夜の一燈でどんなに嬉しかったことか。駐在員の話によると、これからは山道で朝鮮側の歩哨と、ソ連軍約一個中隊の警備本部があり、さらに先の三十八度線に歩哨が約二時間おきに送られている。この歩哨の交代時間をねらつて突破せよ、とのことだった。小南ではソ連軍自身の嚴重な検査（身体荷物）があり、私が大事に持っていた唯一の通行手形の証明書も、朝鮮側発行の証明書も取り上げられ破棄された。母の持っていた観音経も、平壤での貴重な重要書類、記念写真類も全部接收破棄された。我々の持っていた日用品入りのリュックサックもほとんど空になつてしまった。それでもそれが当然のようにだれも、何にも言わなかった。ただ内地へ帰れるという目的さえ達成できれば、そんなことは問題ではなかった。

我々の国境突破が近づくにつれて、私は団長としての責任の重大さを感じた。小南で一泊だがどうしても

眠れなかった。平壤脱出後三十日が経過していた。その間昼夜の別なく恐らく私の生涯を通してあれほど緊張して身心共に酷使したことはあるまい。徹夜の連続であつたが人間の精神力の偉大さに驚嘆する。これも皆先祖の御加護と深く感謝して眠れぬ夜を明かした。

いつの間には空一面に輝いていた星が消え、うす明るく東の空が白み始めた。いよいよ三十八度線の間が見え出した。団長として最後の注意を一同に話し、無事突破を祈った。どの団員の顔も必死の形相凄まじく、既に突破の意気軒昂なるものを感じた。この山を越えれば懐かしい故郷へ帰れる。一人の犠牲者も出さないこと。これが私のただ一つの願いである。過去一カ年の不安と焦燥、精神的、肉体的疲労から皆が解放されるのだ。

万一の場合は、団員全部を内地へ送り、私一人の犠牲で済めば、とも思った。

いよいよ突破の時が来た。予定のとおり第一班を先頭に一列に並び、最後に私が落ご者を監視しながら進んだ。途中全身の力をふりしほり身内に助けられて登

つて行く病人、母乳不足で餓死寸前の赤ん坊を捨てようとする栄養失調の母親など、叱りつけたり、励ましたりしながら皆で最後の力をふりしぼり、頑張つて、頑張つて、ついに私たちは頂上を極めることができた。だれもが無言、一生懸命だった。

そのとき突然、威嚇射撃の銃砲の音、皆、顔面蒼白、肝をつぶして立ちすくむ。沈黙、どうなることか。この間二十分。不幸中の幸いかそれつきり何も聞こえなくなり銃声は消えた。

再び沈黙の行進、本当に皆命がけだった。前方に開城の町が点在している。いつの間にかだれの顔にも涙があとから、あとから流れ出てくる。開城。開城。

終戦前であれば平壤から汽車で三時間のこの町であったのに……。

今こそ生涯忘れることのない町が我々の眼前にある。北鮮にはいまだ脱出の機会を得ずして、故郷の山河を夢に見つつ残留している多くの同胞がいることを思えば、何となく足も遅れがち、一日も早く御無事に帰国をと願わずにはいられなかった。平壤の町、国籍、民

族を超えて学び育った町ともお別れだ。

こうして最初の計画どおり私の団体からは一人の落ご者も出ず、全員無事開城の米軍直轄の日本人収容所（テント）に収容された。

心身ともに疲労から解放され、だれの顔にも安堵の色が見られ、土間の上とはいえ初めて前後不覚に安らかに眠ることができた。ここで日本人会に、一同無事、一人も犠牲者がないことを報告し、関係者から賞賛を受け再び開城医務室勤務を命じられた。さすがに米軍収容所の周囲には鉄柵が張りめぐらしてあったが、行動は自由であった。百人収容のテントが八十。ここで検疫、諸般の手続完了までテント生活、検疫の終了した者から順次十日間の滞在機関を終わり釜山へ送られた。

釜山の日本人収容所で再び嚴重な身体検査と検疫が行われ、内地への連絡船を三日間待った後、引揚船に向けて米軍の上陸用舟艇に乗り込んだ。このとき、妻が貧血を起こし、今少して残されるところを強引に連れ込んだ。

引揚船は船長以下船員は全部日本人で船室は我々に懐かしい青畳で、やつと伸び伸びすることができた。食事は久しぶりに味噌汁と米麦の御飯、合掌。感謝の涙でしばらくは食事ものを通らなかつた。朝鮮の山々とも、平壤とも永遠のお別れだ。再びこの女界灘を渡ことはあるまいと思つた。折から満月の朝鮮の海を引揚船はすべるがごとく一路内地へ。

この夜、船長の配慮で慰安会が行われ、皆が笑顔で喜んで夜の更けるのも忘れていた。

翌朝午前八時、佐世保港沖に停泊、ここでまた検疫のため三日間船内生活を送つた。

忘れもせぬ、昭和二十一年九月十四日、やつと佐世保上陸が許可された。今でも記憶に残るのは、佐世保港の壁に、

「此処は皆様方の夢に見た内地です。どうか、御安心下さい」

と書かれてあつたことだ。内地、内地、私たちは手の舞い、足の踏むところを知らなかつた。

平壤出発以来四十日余り、上陸後私たちは引揚者寮

に入り諸種の（衣類、食糧、お金千円）給付を受けた。引揚団員の一人一人に配給された五勺のサントリウイスキーを持つて皆私のところへ集まり、私も父と大いに飲み語り合つた。苦楽生死を共にした七百人の方々とも永遠の別れとなつた。明日はそれぞれの故郷へ向かうはずである。

終わりに

私（信子）の家族親族グループ二十八人も昭和二十一年五月、平壤駅―貨車―沙里院經由海州間軽軌―鶴峴下車―徒歩―部落で越境許可を待ち徒歩で三十八度線越え―開城―京城―仁川港―佐世保に同年六月二十五日無事に帰ることができた。

弟の家族は八人を含めて七百人の北鮮脱出団員の方々も、また、終戦直前召集された軍医の夫が戦死し、南鮮の晋州道立病院から引き揚げた妹親子も、敗戦を海外異郷の地で迎えるという苦難を体験した。それぞれの引揚げの時期、ルートは違つても、その過程での苦しみを超えて、全員が無事に、生きて祖国へ引き揚げて来ることができたことは、敗戦にまつわる海外居

住者の歴史的境遇の中での奇跡のように思われる。私たち世代のだけれどもが否応なく経験した戦争の悲惨さ、残酷さ、と同時に心の底からこみ上げてくるものは、平和への切実な願いである。後世を生きる人々の幸せを思えば、その前途ある輝かしい人生を二度と再び戦争の傷跡で汚すことがないように、ここに心からなる「不戦の祈り」を捧げ、今は亡き弟の冥福を祈るものです。

【執筆者の横顔】

中本信子さんは徳島県名西郡浦庄村で開業していた河崎正信歯科医師の長女として、明治四十二年生まれ、現在水戸市に在住している。

大正六年に徳島県の父親が朝鮮総督府の医務官として任用され、平壤の道立病院歯科医長に命ぜられた。当時、信子さんは八歳、弟の智俊氏は二歳で両親とともに渡鮮したのである。学業優秀なところから二人とも歯科医師となった。つまり河崎家は平壤府の名士であり歯科医師一家でもあった。

名望家で歯科医師の信子さんは、全鮮にまたがる陶器金物の大商家中本家から三顧の礼をつくして懇望もしたがたく河崎家の両親も信子さんを中本家に嫁がせた。

信子さんは大商家の内儀までは順風満帆であり、世にもうらやむばかりの生活であった。

ところが、昭和十九年、信子さんは平壤の危険を感じ子供を連れて、平安北道の博川にいる叔父のところへ疎開していたところ、銃剣をもった朝鮮人徒党の暴動に遭い、あわやというとき、叔父夫婦を親のように慕っていた「オモニ」（朝鮮人のお手伝いさん）が朝鮮人の衣服、靴まで変装用として持参して、今直ぐ主人のトラックで平壤に発つてください、と言われたお陰で、信子さんは子供ともども命拾いをした。

八月十五日に家族で玉音放送を拝聴したあとは必死になって引き揚げて生きのびることを第一として考えていたが、終戦の年、二十年は過ぎて、昭和二十一年になっても引揚げの命令なく、朝鮮は内乱の状況である。信子さんは敗戦の悲惨さを骨身にこたえていた。

弟の智俊南科医師は、ソ連軍の捕虜となって平壤の解放軍診療所受持ちを命ぜられた。その当時、平壤での日本人死者は約二万人いた。間もなくソ連軍が北方に向かったあと、智俊さんは身を捨てて浮ぶ瀬もありとして苦肉の策、北朝鮮政府の命に従って千辛万苦三十日間の日数をかけて一人の落こ者も出さず、三八度線の苦境を脱出することができたのである。

弟、智俊氏の勇敢な決断と実行できたのは目に見えない神仏の加護に救われたと信子さんは言われるが、姉信子、弟智俊の姉弟相助けあう心と、親思い、血は水よりも濃しのごとく、三百二十人の引揚者みな同じであるとの、一視同仁の河崎家の家風に信子さんと智俊氏の人柄が今に生きている。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

終戦前後

千葉県 橋本 薫 一

明治五年（一八七二年）九月十三日、新橋横浜間で文明開化の象徴的存在として開業した鉄道は、明治の末になると国内官営、私鉄の総延長は九千キロに及んだ。

更に日清戦争のあと朝鮮半島の鉄道敷設権を得て、日露戦争前後に京仁線（京城―仁川）、京釜線（京城―釜山）、京義線（京城―新義州）などの幹線鉄道を建設し、明治三十九年に国有化し、韓国併合後は朝鮮総督府の管轄下におかれた。

大正末期には、東京から下関、釜山、京城經由で鴨緑江岸の新義州まで二千三百キロを二月半で結ぶようになった。そして、南滿州鉄道につながり、日本と大陸を結ぶ主要幹線を形作っていたのである。

父も大正初期、国鉄職員として釜山に渡った。朝鮮